

学習支援からみた「思う」と「考える」

学習支援・教育開発センター 准教授 澤宏司

ラーニング・アシスタント ヤオイミン

(グローバル・スタディーズ研究科 博士後期課程)

ラーニング・アシスタント 久保志織

(文学研究科 博士前期課程)

1. はじめに

2021年12月14日、ラーニング・commons（以下、LC）主催のイベント「レポートに『思う』を使わないのはなぜか」が行われた（図1）。これは感染症拡大対策下の2020年度に始まった「commonsランチ会」（矢内・趙 2021; 益田 2021; 玉井 2021）の通算4回目となるイベントである。commonsランチ会は感染症拡大対策以前に学内の教員を招いたややカジュアルなイベント「commonsカフェ」の流れをくむものである。オンライン形式という制約、社会情勢への臨機応変な対応など、従来とは異なる状況下で、LC外から講師を招くのではなくラーニング・アシスタント（以下、LA）を中心とする形式へと変更したのがcommonsランチ会である。

本稿ではこのイベントの経緯や狙い、当日の様子を簡潔に記録するとともに、イベントの主たるテーマとなった「思う」と「考える」について、学習支援が担う機能や自然科学との関連を交えながら検討する。



図1 「レポートに『思う』を使わないのはなぜか」の様子。
左から順に澤、久保、ヤオ

2. イベントの意図と実際

本企画は良心館ラーニング・コモنزのLA・ヤオイミン（グローバル・スタディーズ研究科）の発案により検討が始まった。一般に、レポートでは「思う」の使用は控えるよう指導される（慶應義塾大学教養研究センター 2014）。海外からの留学生であり、現在は日本語でも論文を書くヤオは、自身が日本語での執筆の初学者だったときに、レポートにおける「思う」の扱いを疑問に感じていた。日本語を母国語とする学生であれば迷うことなく受け入れそうな疑問をテーマとしたのはヤオによるところが大きい。

レポートにおいて、「思う」の言い換えの候補となるのが「考える」である（小森・三井 2016）。カント哲学を研究しているLA・久保志織（文学研究科）は、その専門から「思う」の「考える」への言い換えの形式的、内容的な影響について関心を持ち、企画参加に賛同した。レポートの書き方を含む、アカデミック・スキルズの指導はLCが期待される主要な学習支援の1つである。この観点からもこのテーマ設定は妥当であった。1回生など経験の浅い学生に対して、「思う」と「考える」の実用的な橋渡しと、これに付随するやや抽象的となる話題の2つを同時に提供することがイベントの意図となった。

企画の検討に際し、澤からヤオ、久保への提案は大きく以下の3つであった。

- ・自身が初学者だった頃を念頭に、現在の初学者の助けになる具体的な話から始める
- ・中盤ごろから自身の研究テーマに踏み込み、参加学生の関心を引く
- ・最後に簡潔にまとめをする

これらは、ヤオや久保が専攻する思想や哲学に興味を持つ学生だけでなく、より広範な学生の参加を想定したこと、ヤオ、久保それぞれの変化が参加学生の参考になることを目論んだことによる。また、感染症拡大によりレポート課題が増えたが、そのような状況でも学生が主体的・積極的にレポートに取り組めるようになることも念頭とした。

イベントは今出川校地の普通教室で開催すると同時に、Microsoft Teamsによりリアルタイム配信を行うハイブリッド形式にて、昼休みの時間の40分間で行われた。ヤオと久保の対話を主とし、澤が進行を担当した。実際には互いの話を受けながら交互

に発言をしたが、ヤオと久保の発言の概要は次の通りである。

ヤオ

- ・日本語でレポートや論文を書き出した頃、「思う」の扱いが不思議であった
- ・「思う」はひとりで勝手に行う行為である
- ・エッセイは「思う」であり、レポートは「考える」である
- ・他者を前提とする引用は「考える」的であるのに対して、剽窃は「思う」的である
- ・引用は「ニヒル（虚無）を超える機会」になる
- ・研究計画書で求められる独創性は引用及び先行研究を踏まえたうえで生じたものである
- ・他者の意見を尊重しつつ、自分の意見をどう盛り込むかが重要である
- ・レポートや引用を消極的な作業だと考えずに、主体的・積極的にそれを自分の挑戦として受け取ることは楽しい

久保

- ・「考えられる」は他者とのあいだで自分がどのように考えているかを表す表現である
- ・自分だけが独断的に「考える」のではなく、自分と同様に理性を備える人も「考える」
- ・「思う」は「無法則的な自由」であり、「考える」は道徳的自由である
- ・美しいといわれるものは法則を持っており、無法則的なものは「無意味な独創性」である
- ・哲学者と同化しつつ「哲学者をどう解釈するか」が自分の意見になる

質疑応答の時間には対面参加、オンライン参加の双方の学生から質問が寄せられ、参加者も交えた活発な議論が展開された。

3. 「思う」と「考える」と自然科学

イベントの内容をさらに簡潔にまとめると、「思う」は法則や前例にとらわれない無際限の思考を表し、「考える」は対話の相手や同様に思考した先人を意識した思考



と捉えることができる。本節では「思う」を主観的思考、「考える」を客観的思考としよう。

近年、自然科学や工学において、観測者の人称を考慮に入れる研究が展開されている。科学、特に自然科学は観測者や語り手によらない客観的、普遍的な記述を目指すものであるという認識が一般的である。よって人称を考慮する科学の展開は奇異な印象も与えかねない。ではあるが逆に言えば、従来同様の科学の発展にも人称の観点が貢献する可能性がみえてきたとも考えられる。

諏訪らが提唱、展開する「一人称研究」はその1つである。人工知能研究や認知科学に端を発する一人称研究は、諏訪の言によると「一人称視点で対象となるモノゴトを観察・記述し、そこに知の姿についての仮説を見出そうとする」（諏訪・堀 2014）となる。また続けて「一人称研究は、当然のこととして、従来の科学観に抵触します。普遍性を見出すことには貢献できないではないか」（諏訪・堀 2014）と言い、一般的な科学観との関係に自覚的である。そのうえで「従来の研究方法にも主観は入り込んでいるし、われわれが主張する一人称研究にも、個別具体事象の記述から仮説を立てるところに主観が入り込んでいます。入り込んでいる場所が異なるだけです」（諏訪・堀 2014）と言う。

また通常の科学で行われる客観的な観察を「三人称視点による探究（三人称研究）」と呼びながら「一人称研究と三人称研究は、各々、得手不得手があります。知能研究の分野で一人称研究が提唱されたのは、従来の研究があまりに科学の方法論（特に客観性）を無自覚的に信奉してきたため、内側の視点に立って初めて捉えることのできるものごとや解釈を、不用意に捨て去ってきたからです」（諏訪 2020）と言い、一人称研究の妥当性を主張する。

「思う」／主観的思考、「考える」／客観的思考との対応を考えると、前者が一人称、後者が三人称となるであろう。であれば「思う」から「考える」への移行は、一人称的な語りから三人称的な記述へと論や態度を進めるのに他ならない。一人称研究の進展は、今回の「思う」と「考える」の議論の参考になりうる。

4. 「思う」と「考える」と学習支援

学習支援の場において繰り返し強調されるのは「相談した学生に答えを教えるのではなく、相談した学生が答えにたどり着けるような支援をする」ということである。学習支援のこの立場と、「思う」／主観的思考／一人称と「考える」／客観的思考／三

人称の関係を検討する。

「教える」という行為は、学生が知らないだけで客観的には存在する知識の伝達を意味する。一方、「支援をする」には、支援する側が提供するいくつかの客観的な知識のもとに、相談学生自身が整合的に知識を構成することが期待される。支援する側が新しい知識の提供や知識間の関係の整理をしない場合には、相談学生は客観的な答えに至らないか、または一人称的な、ある場合には独善的な答えに至るのみとなる。つまり、学習支援は一人称から三人称への橋渡しの支援をしているといえる。一人称研究との関連でいえば「一人称視点と比べる対象は、スタンドから俯瞰して試合をみているサッカーコーチの視点です。一人称視点は本質的に局所視野であるのに対して、コーチの視点は全体視野を有しています。つまり三人称視点です。一方、選手は、原理的には一八〇度の視野以外（後ろ側）はみえていません」（諏訪・堀 2014）となる。

5. 結語

本稿では、イベントのテーマであったレポートなどにおける「思う」から「考える」への移行と、自然科学における新しい展開、さらには学習支援との関係について検討した。ややもすれば学習とは、どこかにある十全な知識の獲得とみることも可能であるが、「思う」と「考える」の比較により、より主体的な学習の可能性や必要性の方向性が見えてきたと考える。一人称から三人称への移行には「思う」だけでも「考える」だけでも足りない。初学者を含むすべての学習者には、「考える」で構成される世界に自らの「思う」を慎重に忍ばせることが必要であり、求められている。

謝辞

同志社大学学習支援・教育開発センター所長の岡田幸宏先生、同センターの先生方、特にイベント時にたいへんお世話になった大谷紗也加先生に感謝申し上げます。両校地LCのLAの皆様にも感謝申し上げます。同センターの事務職員の皆様、受付スタッフの皆様にもこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。

文献

慶應義塾大学教養研究センター，2014,『アカデミック・スキルズ——学生による学生のた

めのダメレポート脱出法』慶應義塾大学出版会

小森万里・三井久美子, 2016, 「ここがポイント! レポート・論文を書くための日本語文法」
くろしお出版

益田高成, 2021, 「新企画「コモンズランチ会」の始動」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』12: 59-63.

諏訪正樹・堀浩一編, 2014, 『一人称研究のすすめ——知能研究の新しい潮流』近代科学社

諏訪正樹編, 2020, 『「間合い」とは何か——二人称的身体論』春秋社

玉井湧太, 2021, 「コモンズランチ会「音でみる? 生きもの研究」」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』12: 64-69.

矢内真理子・趙智英, 2021, 「コモンズランチ会と異分野の交わり」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』12: 55-58.